

落語表現に見る家族像の変遷

—「芝浜」の分析を中心として—

岩本 恵*・山根 真理**・杉浦 淳吉**

1. はじめに

本研究の目的は、落語表現の分析を通して、徳川時代から近代にいたる家族像の変遷を理解し、家族の歴史的変動を捉えることである。落語は、徳川期から現代へと続いて存在してきた口承文芸であり、その歴史的変遷を家族史との関連で見ることができる資料であると考えられる。本研究の家族研究にとっての意義は、落語の成立および展開期が近世と近代をまたぐものであり、近代的な家族イメージや規範が作られた過程が分かるという点である。日本における「近代家族」に関わる実証研究はもっぱら明治以降の刊行物によって考察されてきているが、落語資料は近世からあるので、近世から近代への連続性や断絶について考察できる。

また同時に、落語を通して、子どもたちと家庭科で家族の学習を考えたときの一つの視座を得ることも目指している。落語の話の起源や変遷を辿ることで、家族や人間関係の「伝統」について、当然視してきた常識を問い直すことができると考えられるためである。

家庭科の教科書における家族の扱いは、家族の現実や機能を固定的なものとし、家庭内の問題解決のための技法に終始しているという課題があると指摘されている(鶴田他, 1996, 鶴田, 2004)。CiNii において「家庭科 落語」と検索したところ、家族学習の実践において落語を題材に親子関係を教える授業の実践報告が一件あったが、これも上記の枠を超えられず、落語を題材にして家族に必要なコミュニケーションの問題を扱っていた(富士栄, 1993)。古典的な題材を扱っていながら、歴史的な視点の欠如があると考えられる。

家庭科は、「生活にかかわるさまざまな社会科学・自然科学に関連する課題を含み、生活をどのようにしていったらよいかという視点で学ぶ総合的な学習をする教科」である(鶴田, 2004, p.167)。子どもは、共同的関わり合いのなかで生活文化を学び、多様な生き方を選択していく主体的な個人なのである。そのために家族学習には、子どもの側から「ジェンダーや家族についてのアイデンティティを問い直す機会を保障していくこと」が必要である(山田, 1996, p.35)。

その家庭科教育に対して、この研究が果たす意義は二つあると考える。第一に日常的な生活文化の探究を通して、自分または人間を歴史的な存在として理解する方法を学ぶことである。落語は、今でも庶民の芸能であり、誰にでも分かるような題材である。その落語の探求を通し自分の生活と照らし合わせることで、「家族の歴史」を学ぶことができる。そして、自分をその「家族の歴史」のなかに位置づけることができる題材であると考えられる。第二に、落語を使う意義として、過去の生活を表現した生活文化を読み解く目を養うことができることである。この研究を通して、落語のように過去の生活を表現しているように見えるものを読み解いていく視点を示したい。

本稿で分析対象としたのは、夫婦関係を描いた演目「芝浜」である¹⁾。「芝浜」の典型的なあらすじは以下のものである。お酒ばかり飲んで仕事をしない亭主がある朝、偶然、芝浜で財布を拾う。そして慌てて家に帰るが、現状を鑑みた女房は財布を拾った事は夢にして、なかったことにしてしまう。それから亭主は改心し、朝から夜まで一生懸命働くようになる話である。「芝浜」を選択した理由は二つある。第一に家族関係に関わる話であること、第二に徳川期から資料が刊行されており、継続的に観察できる資料であることが挙げられる。よって、本研究においてこの演目の選択は適切であると考えられる。

2. 資料について

2.1 収集方法

本研究の方法は資料分析である。これまでに出版された落語の資料から、分析対象を抽出した。資料は、速記本および落語に関する文献（中込重明，2004，『落語の種あかし』岩波書店、武藤禎夫，2007，『定本落語三百題』，岩波書店など）である。速記本とは、その場で語られた話を文字に起こしてまとめられたものである。「芝浜」については、その原拠にあたる噺本との関連が分かっているため、噺本の内容も参考にした。

速記本の収集方法は、以下の通りである。初めに、二つのホームページ（「落語に関する本」<http://cd-v.net/amaki> および「はなしの名どころ」<http://homepage3.nifty.com/nadokoro/index.htm>）を使用し、落語の演目が収録されている本を特定した。そして、国会国立図書館サーチを利用して文献を収集した。次に、国会国立図書館および伝統芸能情報館にある図書閲覧室²⁾から検索を行い、文献の特定³⁾をし、収集した⁴⁾。

その上で、分析対象となる文献は、口演年⁵⁾を推定して、一番早く口演されたとする資料を選択した。さらに、同じ資料が重ならないように抽出した。つまり、同じ演者の同じ内容のものは除いた。また、演者が特定できない資料についても分析対象外とした。徳川期にあたる二本の資料については、口演年が特定できないため、出版年に基づいて議論を展開していく。

2.2 分析対象

上記の手続きを経て分析対象とする「芝浜」の資料数は、徳川期（17世紀後半～18世紀前半）：二本、明治前半期：二本、明治後半期：四本、大正期：六本、昭和戦前期：二本、昭和戦後期：二本の計十八本である（表1）⁶⁾。分析結果、考察で提示する資料番号は、表1の番号を使用することとする。

表1:「芝浜」 分析対象と時代区分

番号	著者、編集者、速記者	書名	出版社	出版地	出版年	掲載誌(雑誌掲載の場合)、または口演日	題目	演者	口演年 ※1	口演年の中央値 ※2	時代区分 ※3
1	—	かの子ばなし上巻	—	—	元禄03(1690)	—	「俄分限は一炊の夢」	—	— 4	※	1690 徳川期(17世紀後半)
2	松崎堯臣	窓のすさみ巻一	—	—	享保09(1724)	—	「芝浦の正直息子」	—	— 4	※	1724 徳川期(18世紀前半)
3	酒井昇造	流行速記の花	金泉堂	東京	明治22(1889)	—	「芝浜の革財布」	三遊亭小圓太	明治07(1874) - 明治22(1889)	1881.5	明治前半期
4	丸山平次郎	翁家さん馬講談集	駢々堂	大阪	明治26(1893)	—	「時は金女房の貞節」	翁家さん馬	明治06(1873) - 明治26(1893)	1883	明治前半期
5	暉峻康隆 [ほか]	口演速記明治大正落語集成(6巻)	講談社	東京	昭和55(1980)	「文芸倶楽部」5巻8号 明治32年6月10日	「芝浜の財布」	三遊亭圓生	明治15(1882) - 明治32(1899)	1890.5	明治後半期
6	浪華桂派連	桂派落語高座の色取 二集	杉本書店	東京	明治40(1907)	—	「芝浜」	三遊亭圓馬	明治17(1884) - 明治40(1907)	1895.5	明治後半期
7	森暁紅	圓右小さん新落語集	三芳屋	東京	明治44(1911)	—	「芝浜」	三遊亭圓右	明治16(1883) - 明治44(1911)	1897	明治後半期
8	博文館編輯局	人情話 前編	博文館	東京	明治44(1911)	—	「芝浜の革財布」	三遊亭金馬	明治39(1906) - 明治44(1911)	1908.5	明治後半期
9	葵々斎桃葉 [ほか]	講談落語色くらべ	弘学館	東京	大正04(1915)	—	「芝濱」	柳家小せん	明治43(1910) - 大正04(1915)	1912.5	大正期
10	矢野誠一	昭和戦前傑作落語全集(1巻)	講談社	東京	昭和56(1981)	「キング」昭和03年11月増刊号	「芝浜の財布」	入船亭扇橋	明治38(1905) - 昭和03(1928)	1916.5	大正期
11	編集部	柳家三人集	三芳屋	東京	大正14(1925)	—	「皮財布」	柳家つばめ	大正02(1913) - 大正14(1925)	1919	大正期
12	各派真打連	落語全集	大文館書店	大阪	昭和04(1929)	—	「済んだ夢」	露の五郎	明治43(1910) - 昭和04(1929)	1919.5	大正期
13	野間清治	落語全集(下)	大日本雄弁会講談社	東京	昭和04(1929)	—	「芝濱」	柳亭左楽	明治44(1911) - 昭和04(1929)	1920	大正期
14	今村信雄	名作落語全集 1 開運長者編	騒人社書局	東京	昭和04(1929)	—	「芝濱」	桂文楽	大正08(1919) - 昭和04(1929)	1924	大正期
15	大日本雄弁会講談社	修養全集 第6巻(滑稽諧謔教訓集)	大日本雄弁会講談社	東京	昭和04(1929)	—	「芝濱の財布」	桂文治	大正11(1922) - 昭和04(1929)	1925.5	昭和戦前期
16	松浦泉三郎	新作落語名人三人集	室戸書房	東京	昭和18(1943)	—	「新芝濱」	春風亭柳好	大正06(1917) - 昭和18(1943)	1930	昭和戦前期
17	山本進 [ほか]	落語名作全集(1巻)	普通社	東京	昭和35(1960)	昭和32年11月27日 第10回東横落語会口演	「芝浜」	桂三木助	昭和25(1950) - 昭和32(1957)	1953.5	昭和戦後期
18	川戸貞吉、桃原弘	五代目古今亭志ん生全集(第3巻)	弘文出版	東京	昭和52(1977)	—	「芝浜」	古今亭志ん生	昭和14(1939) - 昭和48(1973)	1956	昭和戦後期

※1 口演年については特定が困難であるが、以下のように設定した。

基本的に口演年は「演者の襲名年から資料の刊行年」または「演者の襲名年から演者の没年」と幅を持たせて推定、設定した。

※2 口演年を時代区分に分類するため、便宜的に中央値を取った。

※3 時代区分は以下のように設定した。

「徳川期(17世紀後半～18世紀前半)」: 元禄元年(1688)～享保21年(1736)

「明治前半期」: 明治元年(1868)～明治22年(1889)

「明治後半期」: 明治23年(1890)～明治44年(1911)

「大正期」 : 大正元年(1912)～大正14年(1925)

「昭和戦前期」: 昭和元年(1926)～昭和19年(1944)

「昭和戦後期」: 昭和20年(1945)～昭和64年(1989)

「徳川期」の時代区分については、この時代区分を初めから想定していたのではなく、

「芝浜」の二本の話が結果としてこの時期(17世紀後半～18世紀前半)のものであったため、このように設定した。

※4 徳川期の二本については、口演年は推定できないため、刊行年に基づいて議論を展開していく。

3. 分析視点

3.1 近代家族論の視点

本研究では近代家族論から導きだした視点（落合，1989）をもって分析していく。「芝浜」の家族像を分析考察するために、近代家族論の特徴を三つの視点⁷⁾、近代家族を支える装置について三つの視点でまとめた。

近代家族論の特徴に関わる三つの視点の第一は、家族集中化である。家族集中化は、家族の集団性が強化されたことによって現れる現象である。家族集中化の条件となるのは、家内領域と公共領域の分離である。第二は、情緒化である。ショーターは、家族構成員相互の愛情について、ロマンティック・ラヴ、母性愛、家庭愛という家族間成員の心性が、外部と隔離した場を持つ家族を作ったという（ショーター，1987）。これは近代的価値であり、愛情のイデオロギー、ジェンダーの神話によって支えられる。「芝浜」のテキストを分析するにあたっては、女房がどのように描かれているのかに注目する。第三は、性別役割分業である。職業労働と家事労働の鮮明な境界線と、二つの労働の男性／女性への振り分け、家事労働に対する愛情価値の付与は、近代的な家族の特徴であった。この点については、女房の仕事と亭主の仕事について注目して分析する。

家事労働に注目したフェミニズムの研究潮流において、家族は経済的に近代社会を支える装置であるという視点が生まれた（山田，1994）。ここでは近代家族を支える装置について、山田が整理した三つの点を取り上げる。第一に愛情のイデオロギー、第二にジェンダーの神話である。夫婦の関係における妻役割は、ジェンダーに支えられ愛情のイデオロギーがあると捉えられている。この点については、女房がどのように描かれているのかに注目して「芝浜」のテキストを分析する。第三に、国家の介入である。これについては、国家が話に出てくる文脈について、分析考察する。

これらの視点に加えて、階層差についても検討する。日本における近代家族の成立は、大正期には新中間層に、1960年代の高度経済成長期には都市に流入した労働者層にも広がっていったという研究がなされている。日本の新中間層は、専門知識や技術を提供することで俸給生活をするサラリーマンである。落語を分析する視点として考えたいことは、落語を聞く人たちがどの階層に属し、どのような形で近代家族像が語られて広がっていったのかについてである。そのために、どの職業や身分の人物が落語に描かれているのかについて着目していく。

3.2 日本における「近代家族」に関する実証的研究

次に日本における「近代家族」に関する実証的研究を検討し、メディアによる近代的家族像成立の時期と、表現のされ方を分析した。そこで明らかになったことは、二つある。

第一に、明治期の雑誌分析において、明治20年前後をピークとして、家族団欒や家族員の心的交流に高い価値を付与する新しい家族のあり方が多く現れたことである（牟田，1996）。この雑

誌は当時の論調を代表する発行部数の多い総合誌・評論誌である。3.1 で設定した視点に即して言えば近代家族の特徴である、家族集中化と情緒化が見られるのである。

第二に、明治 20 年後半から 30 年代を転換点として、婦人・家庭雑誌において、美化された主婦像、儒教的・封建的な女性像が現れていることが分かっている（牟田，1996）。同時に、上記の総合誌においては、家内領域についての問題の扱いが無くなっていくとされる。明治から大正期には多くの婦人雑誌が生まれ、近代社会が求める新しい女性像を提示していた（木村，2010）。木村は、大正期（1920 年代）に大衆化した商業婦人雑誌において、近代的なジェンダー秩序によって成立した主婦像の分析をしていた。近代家族の特徴である、性別役割分業のなかで形成された女性像についての分析である。以上のような、日本における近代家族論の実証的研究によって明らかにされているのは、分析対象となった雑誌メディアの特性上、新中間層以上の人たちの家族像であった。

4. 徳川期以降の社会変動と家族形成

4.1 徳川期の歴史人口学研究

続いて、徳川期の歴史人口学研究を検討した。庶民層が家族の話に関心を持つ人口学的土壌は徳川期にあったのだろうか。ここでは二つの研究の知見を検討し、整理した。

第一に、徳川末期に江戸の都市雑業層が結婚年齢を早め、家族形成を促していたと考察されている点である（斎藤，2002）。都市雑業層たちは自由な労働環境にあり、就職機会が多かったため結婚年齢が早まったという。第二に、東北農村のライフコース研究によると、19 世紀以降、生き延びるための手段として代々続く「家」が形成されたと考察されている。農村は都市とは異なって、農作物を生産する経済的基盤があり、「家」を持つことでその基盤を維持させていったと考えられる。二本松藩仁井田村（現在の福島県）の人別改帳を分析した平井（平井，2006）は、離婚までの期間に着目し、結婚から離婚までの期間が 5 年に限定されたことを捉え、これを「家」の確立の一側面であると指摘している。

東北農村の「家」と、都市の家族の違いは、その経済基盤である。東北の「家」とは生産基盤のある「家」であり、江戸とは異なる形の家族であったと推測できる。そのような労働環境の違いがありながらも、徳川末期において、それぞれ家族形成が促される社会背景があったのである。

4.2 明治期以降の働き方と家族形成

次に落語が展開してきた時代とその背景を理解するため、歴史人口学研究と明治期以降の研究をつなげて家族の歴史的変動を捉える。森岡（森岡，1993）は、明治期末期の家族研究を整理し、産業化による家族変動の促進要因を、人口増加による新しい家の創立、交通の発達、産業構造の変化から説明している。

明治期からの総人口に見られる特徴は、人口増加である。1875 年（明治 8）から 1920 年（大

正 9) まで、人口は増加し続けた。これは、出生率の高さと伸びに起因する。出生の増加は、その人口が結婚適齢期に入った 20 年後において、結婚数の増加をも促したという。この時期に農村から流出した若者が都市部において、集中的に新しい家を創立させたと考えられている。農村では商品経済の浸透によって、経済的基礎が崩壊し、都市への出稼ぎが増えたのである。この明治期からの人口増加は、経済活動の拡大の要因となった。鉄道、船舶の交通の発達、労働市場の拡大、労働力移動の促進、産業の発達を支え、労働者の働き方を大きく変えた。

産業構造の変化については、第一次産業就業者の就労比の低下が見られ、その分、第二次、第三次産業就業者が増加したという。都市産業のなかでも、工業分野の成長が著しく、職工数 500 人以上の工場の増加があった。つまり、農村の生活基盤をなくし都市へ流出した若者は工場の労働者となり、給与を与えられる労働に就いたと考えられる。以上をまとめて、森岡は、「19 世紀末から 20 世紀初頭にかけての日本資本主義確立過程において、都市では経済的な生産・分配の諸機能がかかりの程度家業経営を離れて企業に移り、企業など事務所からの給与所得で家計を支える人々が大きな比重を占めるようになった」（森岡，1993，p.64）と述べている。都市部において新しい家を創出した工場労働者たちが結婚数の増加を支え家族を形成するようになったのも、19 世紀末から 20 世紀初頭である。

ここで、徳川末期の江戸に形成されたとされる都市雑業層と、明治期以降の産業化のなかで形成された工場労働者層について比較する。共通点は、農民のように生産手段を持たず、外に働きに出ている点である。相違点は、工場労働者には、雇用主から支払われる給与がある点である。その町工場の世界は、明治以降、都市の下町において新たに成立したものである。（斎藤，2002）

5. 「芝浜」に描かれる、夫婦関係の特徴と変遷

それでは、「芝浜」を分析して明らかになった知見を整理していこう。

5.1 主要登場人物について

徳川期（17 世紀後半～18 世紀前半）に口演された二つの話の主要登場人物は、十介（人名）と亭主（資料 1）、若い魚売り（資料 2）であった。話のあらすじは、男が財布を拾うが、宿の亭主に取りられて夢だったのかと思う、落ちのある単なる笑い話（資料 1）であったり、若い男が財布を正直に届け出るといふ、所謂正直者は偉いという話（資料 2）であった。このように、徳川期の話のなかで女房は重要人物になることはなく、家族の関係がテーマになることもなかった。

「芝浜」の女房は徳川期には中心人物ではなかったが、明治前半期から女房が中心人物となり、「芝浜」が典型的な夫婦の話になることが分かった（表 2）。

表2:「芝浜」 主要登場人物の五つの類型

番号	題目	演者	口演年	時代区分	主要人物 ※1	類型 ※2
1	「俄分限は一炊の夢」	—	(元禄03(1690)) ※3	徳川期(17世紀後半)	十介(人名)、亭主	i
2	「芝浦の正直息子」	—	(享保09(1724)) ※3	徳川期(18世紀前半)	若い魚売り	i
3	「芝浜の革財布」	三遊亭小圓太	明治07(1874)–明治22(1889)	明治前半期	女房、亭主、友達	iii
4	「時は金女房の貞節」	翁家さん馬	明治06(1873)–明治26(1893)	明治前半期	女房、亭主、友達	iii
5	「芝浜の財布」	三遊亭圓生	明治15(1882)–明治32(1899)	明治後半期	女房、亭主	ii
6	「芝浜」	三遊亭圓馬	明治17(1884)–明治40(1907)	明治後半期	女房、亭主、友達	iii
7	「芝浜」	三遊亭圓右	明治16(1883)–明治44(1911)	明治後半期	女房、亭主、友達	iii
8	「芝浜の革財布」	三遊亭金馬	明治39(1906)–明治44(1911)	明治後半期	女房、亭主、友達	iii
9	「芝濱」	柳家小せん	明治43(1910)–大正04(1915)	大正期	女房、亭主	ii
10	「芝浜の財布」	入船亭扇橋	明治38(1905)–昭和03(1928)	大正期	女房、亭主、友達	iii
11	「皮財布」	柳家つばめ	大正02(1913)–大正14(1925)	大正期	女房(臨月)、亭主	iv
12	「済んだ夢」	露の五郎	明治43(1910)–昭和04(1929)	大正期	女房(臨月)、亭主	iv
13	「芝濱」	柳亭左楽	明治44(1911)–昭和04(1929)	大正期	女房、亭主、友達	iii
14	「芝濱」	桂文楽	大正08(1919)–昭和04(1929)	大正期	女房、亭主	ii
15	「芝濱の財布」	桂文治	大正11(1922)–昭和04(1929)	昭和戦前期	女房、亭主、友達	iii
16	「新芝濱」	春風亭柳好	大正06(1917)–昭和18(1943)	昭和戦前期	女房、亭主、大家さん	v
17	「芝浜」	桂三木助	昭和25(1950)–昭和32(1957)	昭和戦後期	女房、亭主	ii
18	「芝浜」	古今亭志ん生	昭和14(1939)–昭和48(1973)	昭和戦後期	女房、亭主、友達	iii

※1 話の主要登場人物に焦点を絞って、拾い上げた。主要登場人物とは、会話に出てくる人物である。

※2 五つの類型は以下のものである。

- i. 男
- ii. 女房、亭主
- iii. 女房、亭主、友達
- iv. 女房(臨月)、亭主
- v. 女房、亭主、大家さん

※3 徳川期のものについては口演年が推定できないため、刊行年を記した。

5.2 女房像について

女房像については、二点の結果をまとめよう。

第一に、特に女房は話のなかで役割が大きくなり、亭主を支える女房像が出来上がることである。これについては、話の情緒化が見られると考える。この担い手が女房であることは、ジェンダーの神話に支えられた構造になっていると考えられる。この女房像が、戦時下のものも含み、明治期以降の「芝浜」の女房像である。以上のように「芝浜」は明治前半期から家族の集中化が見られ、情緒的な女房像がうかがえる。この家族集中化と情緒化は家族への関心が強まる近代的価値観を反映していると考えられる。以下は、女房が、「拾ったお金はないよ」と亭主を騙した言い分であり、言い分のなかで一番多かったものである。

「お前さんが此お金を、三年前に拾って呉れた時、わたしは嬉しかったよ、飛び立つ程嬉しかったがね、お前さんの了けんを聞いて見ると、テンデ真面目に稼ぐ考えはなく、只飲んだり食ったり、着物を着たり、みえに使得てしまいなさるようすだから、こりゃ大変、お金はパツパと使得てしまい、後で拾ったと云う事が知れたなら、お前さんもわたしもどんなお咎を受けるか知れない、だからね、わたしはお前さんが酔って寝てしまったのを幸いに、おおやさんに話をすると、拾ったものを黙って使うのはよくない、お上へ届けるがいいと云われたから、お前さんには濟まないが、あの時わたしは夢にしてお金はお上に届けた」(資料 13, pp.347-348)

お金は使得てしまい、「お前さんも私もどんなお咎めを受けるか知らない」から亭主を騙したのだというものであった。このように女房と亭主の関係が強く描かれる。

第二に、女房は近代的な主婦像とは異なり、内職をして稼いでいた。また、女房は亭主の仕事の準備をすることと、お金の工面をすることが典型的な働きであった。明治期以降の女房については、時代的特性はなく、典型的なパターンが見られた。

5.3 亭主像について

亭主については職業とその変化を、四点にまとめよう。

第一に、亭主の典型的な職業は魚屋であった。自営業の亭主が典型パターンである。第二に、戦時下の資料によると、亭主の職業は工場労働者になった。このように戦時下では、亭主は俸給労働者となる。第三に、時代的特性はなく、亭主は其の日稼ぎ人の魚屋から、店を構え出世するパターンがあり、一生懸命働くことの価値観が見られた。店を構える亭主は、店という資本を有す自営業だと思われる。第四に、これも時代的特性はなく、亭主は役所や政府という公的権力を持った組織に嫌悪感を示している。これは、国家的な介入への抵抗意識の表れだと考えられる。

5.4 戦時下の影響について

戦時下の資料（資料 16）は、資料が一つのみであったが、その内容が他の話とは異なっていたため取り上げる。特徴を四点挙げよう。

第一に、亭主の職業は工場の労働者になった。第二に、ここでは、国家のために労働することが当たり前の価値観になった。亭主が一生懸命働く姿を女房が喜ぶように、労働を通じて国家に尽くす意識が強化される。第三に、女房が亭主の名前でもって国へ献金し、戦時下の国の役に立つ国民の務めのために女房も一端を担う姿が描かれていた。以上のように、この労働の価値観の変化と女房の働きから、国家に尽くす国民像が形成されていることが分かった。第四に、戦時下の女房は、「日本人」として酒がひどい亭主とは暮らせないという理由を持っていた。以下は、その女房が亭主を騙したことについての言い訳の台詞であり、そこで女房は「日本人」として酒がひどい人とは暮らせないため離縁しようと思っていたことを告白している。

「余りお前さんの酒がひどくて、とても日本人として お前さんと一緒に暮して行けないから一層のこと離縁をしようと思って 大家さんへ相談に行くと、よし、それまでに思いつめたのなら、俺が狂言を書くから、一番亭主に悪いがペテンにかけろ、欺してみろ、ひよっとしたら旨くいくかも知れねえと教えられて、あれは皆大家さんとわたしで組んだ狂言……」（資料 16, p.36）

以上のように資料 16 については、労働観、ジェンダー役割、行為規範についても国家主義的影響が入り込むようになっていた。

6. 考察

以上の結果を三点についてまとめ、先行研究と関わらせて考察しよう。

第一に、家族の話についてである。歴史人口学研究からは、徳川後期には家族の話に関心を持つ人口学的土壌があったと考えられた。しかしながら、徳川期（17 世紀後半～18 世紀前半）には、女房は中心人物ではなく、その後の明治前半期から中心人物となることが分かった。日本の実証的研究と照らし合わせると、明治 20 年前後をピークとして、新中間層以上の人には、家族団欒や家族員の心的交流に高い価値観を付与する新しい家族のあり方が雑誌記事を通して多く提供されていた（牟田，1996）が、その時には既に、「芝浜」において登場人物が家族に集中化していたのである。民衆娯楽を享受する層にも「家族の話」という近代家族的な認識枠組みが与えられたのではないかと考えられる。

第二に、女房像について考察する。「芝浜」における夫婦間の関係性は強く、亭主を支える女房像が時代を通じて生産されていた。しかしその中身について紐解いていくと、その女房像は内職をして働く女房であり、新中間層の「主婦」像とは異なっていた。近代的な主婦像とは異なり内

職をして稼ぐ女房でありながら、「亭主を支える」という意味では近代的な価値観に支えられた女房像が語られていたのである。

第三に、亭主像についてである。自営業の亭主は、公的権力のある組織に嫌悪感を持っていた。この亭主像は聴き手のメンタリティを反映していた面があると考えられる。しかし、戦時下の資料の亭主像にあっては、国家のための労働が当たり前の価値観となった。この俸給労働者である亭主像は、戦時下においての時勢が反映しているのではないかと考えられる。

7. おわりに

最後に、落語を通して家庭科の家族学習を考えるための視座について、現時点で考えられることを覚書として記し、今後の課題を述べる。

伝統的文芸である落語は、明治期以降の近代的な家族イメージを作り出していたと考えられる。これを全て伝統的な生活を表現しているものだという意識でいると、見誤ってしまう。しかしながら、「近代家族論」という枠組みを持つことで、歴史的な認識が可能になった。その自分のなかでの新たな発見は、考える楽しさがある体験であり、世界の見方も変え、実感を伴った理解へと繋がっていくように思う。家庭科での家族の学習においてもその過程を位置づけることができると考える。家族の学習も、自分の思い込みのまま始めると、自分の思い込みに気付くことができ、楽しく学ぶことができるかもしれない。歴史を学ぶために、歴史を歴史だと捉えられるような認識枠組みを用意して、授業者も学び手も一緒に考え、新たな発見をしていくという授業の組み立てが家庭科における家族の学習に必要なことだと考える。本稿の分析を応用して「芝浜」から家族の学習に提供できる話題として、徳川期では女房が中心人物でない短い話が明治期から典型的な夫婦の話になったこと、戦時下になると話が変わり国家色が強まったことなどが考えられる。この変遷は、家族を歴史上にあるものだと捉え、現在の家族を問い直すような一つの素材とならないだろうか。

最後に今後の課題を三点述べる。第一に、近世と近代をつなげての家族の歴史的変動についての検討である。本研究では、徳川期の歴史人口学研究と経済史などの研究から、働き方と家族形成を検討してきた。しかし、近代における庶民の働き方と家族構成についての十分な考察はできていない。落語の聴き手の階層と関連付けての考察が必要である。

第二に、落語のメディアとしての性質の検討である。落語に関わる社会背景との関連で、落語の機能や落語をめぐる社会関係についての歴史的な考察を行い、そのような観点で落語のテキストを再分析することが必要である。落語は、その成立過程を見ていくと、初めに咄本があった。咄本は戦国時代の武将に仕えた御伽衆⁸⁾や僧侶の手によって成立、発展していき、1620年代ごろから庶民のための娯楽的な要素を持ったものも展開されてきた。落語の変遷は、主君一芸能人間の個別関係を超えて、対象が庶民へと拡大していった過程と捉えることができる。つまり、発信する人と享受する人の相互の関係性のなかで生まれ、選択されて変化してきた。この延長線上に

ある近現代の落語も、話し手と聞き手の相互作用によって成り立つ。「ライブの演芸」である落語は、語る人と聞く人の関係性によって更新され続けるものでもある。この点についても今後の課題となる⁹⁾。第三に、授業または教育全体に関わっての具体的な提案である。このためには「家族の歴史」について行われた授業実践の分析が必要であろう。また、授業者が子どもの現実をどう捉え、落語を扱うのならば何を目的に落語を取り上げるのかを明確にしなければならない。

註

- 1) 本研究は、岩本の修士論文の一部を発展させた報告である。修士論文では、親子関係を描いた「子別れ」についても分析した。(岩本、2013)
- 2) 伝統芸能情報館にある図書閲覧室とは、落語や演芸を興行する国立演芸場が所蔵していた資料を引き継いで保管し、あわせて各種芸能資料の収集をしている施設である。
- 3) 文献特定の手順は以下の通りである。始めに、国会国立図書館サーチを用いて、以下のように検索した。①「落語 集」と検索した。1659 件ヒットした(2012.9.7)。その中から、「芝浜」と「子別れ」が載っている本を検索した。②「芝浜」の別名「芝浜の革財布、芝浜の財布、時は金女房の貞節、革財布、三年後、馬入」から検索を行った。次に伝統芸能情報館の図書閲覧室利用案内から以下のように検索した。①インターネットで内容注記から話の演目で検索した。②落語の演目から本が探せる作品目録によって文献を検索した。
- 4) 「芝浜」に関する文献は、江戸期から昭和期まで刊行されたものが、計 62 本(江戸期 2 本、明治期 12 本、大正期 10 本、昭和期 38 本)あった。リストから外した文献は以下の通りである。
 - ・ 子供用の図書(マンガ、紙芝居など)
 - ・ 平成期に出版されたもの
 - ・ 出版年が分からないもの
 - ・ 話のあらすじだけ載っているもの
 - ・ 小説の一部であったり、歌舞伎や講談など他の文芸のもの
- 5) 口演年の設定方法と限界について述べる。基本的に口演年は、「演者の襲名年から資料の刊行年」と幅を持たせて推定した。資料の刊行年については、一番時期が早いものを選択した。ただし、資料の刊行年が演者の没年より遅い場合は、演者の没年を資料の刊行年に替えて「演者の襲名年から演者の没年」と設定した。幅を持たせて推定したため、細かく口演年を決定できないことが、この分析の限界である。幅広く設定した口演年を時代区分に分類するため、便宜的に中央値を取り、時代を割り振ったが、口演年は正確に示されたものではない。しかし、結果と考察を論じていくために、この割り振った区分を便宜的に使用していく。
- 6) 時代区分は六つに分け、以下のように設定した。「徳川期」：元禄元年(1688)～享保 21 年(1736)、「明治前半期」：明治元年(1868)～明治 22 年(1889)、「明治後半期」：明治 23 年(1890)～明治 44 年(1911)、「大正期」：大正元年(1912)～大正 14 年(1925)、「昭和戦前期」：昭和元年(1926)～昭和 19 年(1944)、「昭和戦後期」：昭和 20 年(1945)～昭和 64 年(1989)の時代区分である。「徳川期」の時代区分については、この時代区分を初めから想定していたのではなく、「芝浜」の二本の話が結果としてこの時期(17 世紀後半～18 世紀前半)のものであったため、このように設定した。
- 7) 修士論文においては、近代家族の特徴は四つの視点としてまとめた。「芝浜」については、その一つである「子ども中心」という視点を除外した。「芝浜」については、夫婦関係の分析を中心に行いたいためである。

- 8) 暉峻（2007）は、伝統芸能としての落語の原点を「当座の興ある咄をすることを職能とする人種」と考え、そこで「御伽衆」の存在を挙げている。戦国時代にこの職能が出現した理由に、遠征や長対陣など、戦陣の必要からだとして暉峻は考察する。天文・永禄（1532～72年）の戦国時代から存在した「御伽衆」は、大名に仕える武人、学僧、家人、茶人、芸人たちである。そのため御伽衆の話題の中心は、武功談や武将の逸話、故事であった。しかし、そのなかでも頼知頼作をもって奉仕する「御伽衆」もあり、笑話的要素もあった。ここから分かることは、御伽衆は咄によって座興を取り持ちながら、大名のために政務を助ける働きを担っていたことである。
- 9) その場にいる人たちの語り合いによって、関係をつなげていくという落語の持つ性質は授業においても展開できるかもしれない。

参考文献

- フィリップ・アリエス, 1980, 『〈子供〉の誕生 アンシアン・レジーム期の子供と家族生活』, みすず書房 (杉山光信・杉山恵美子共訳)
- 有地亨, 1993, 『家族は変わったか』, 有斐閣
- 富士栄登美子, 1993, 「家庭科における『家族』の教育」, 三重県総合教育センター, 『科学技術教育研究紀要』(3):45-52
- 浜野潔, 2011, 『歴史人口学で読む江戸日本』, 吉川弘文館
- 長谷川まゆ帆, 2007, 『世界史リブレット 89 女と男と子どもの近代』, 山川出版社
- 速水融, 1997, 『歴史人口学の世界 岩波セミナーブックス 65』, 岩波書店
- 速水融, 2002 『江戸農民の暮らしと人生—歴史人口学入門』, 麗澤大学出版会
- 姫岡とし子, 2008, 『世界史リブレット 117 ヨーロッパの家族史』, 山川出版社
- 平井晶子, 2006, 「結婚の均質化と「家」の確立—東北農村の場合—」, 落合恵美子編, 『徳川日本のライフコース—歴史人口学との対話—』, ミネルヴァ書房, 第三章
- 岩本恵, 2013, 『落語表現に見る家族像の変遷』, 愛知教育大学大学院教育学研究科 2012年度修士論文
- 木村涼子, 2010, 『〈主婦〉の誕生』, 吉川弘文館
- 黒須里美, 2012, 『歴史人口学からみた結婚・離婚・再婚』, 麗澤大学出版会
- 森岡清美, 1993, 『シリーズ・現代社会と家族② 現代家族変動論』, ミネルヴァ書房
- 牟田和恵, 1996, 『戦略としての家族』, 新曜社
- 武藤禎夫, 2007, 『定本落語三百題』, 岩波書店
- 中込重明, 2004, 『落語の種あかし』 岩波書店
- 表真美, 2010, 『食卓と家族—家族団らんの変遷』, 世界思想社
- 落合恵美子, 1989, 『近代家族とフェミニズム』, 勁草書房
- 斎藤修, 2002, 『江戸と大阪』, NTT出版
- エドワード・ショーター, 1987, 『近代家族の形成』, 昭和堂(田中俊宏 他訳)
- 下中弘, 1989, 『古今東西落語家事典』, 平凡社
- 橘左近, 1999, 『東都噺家系図』, 筑摩書房
- 暉峻康隆, 2007, 『落語の年輪 江戸・明治篇』, 河出書房新社
- 鶴田敦子・朴木佳緒留編, 1996, 『現代家族学習論』, 朝倉書店

鶴田敦子, 2004, 『家庭科が狙われている 検定不合格の裏に』, 朝日新聞社

山田綾, 1996, 「現代家族を読む視点・子どもと家族」, 鶴田敦子・朴木佳緒留編, 『現代家族学習論』, 朝倉書店,

1.2

山田昌弘, 1994, 『近代家族のゆくえ』, 新曜社

付記

本研究を進めるにあたって、有働裕先生（愛知教育大学 国語教育講座）、土屋武志先生（愛知教育大学 社会科教育講座）、真島聖子先生（愛知教育大学 社会科教育講座）、臼井和恵先生（相模女子大学）、山田綾先生（愛知教育大学 家政教育講座）にご教示いただき、貴重な示唆を受けました。記して、感謝いたします。